

精神障害者に対する社会的距離に影響する要因¹⁾

—統合失調症患者への認知における帰属複雑性と曖昧さ耐性の効果の検討—

武藤麻美*・釘原直樹*

Attributional Complexity, Tolerance of Ambiguity and Social Distance for Schizophrenic Patients

Mami MUTO* and Naoki KUGIHARA*

Effects of attributional complexity and tolerance of ambiguity on social distance for people with mental illnesses were investigated. In this study, targets of evaluation (image of people with mental illness vs. no image of people with mental illness)×attributional complexity (high vs. low)×tolerance of ambiguity (high vs. low) within- and between-participants factorial (mixed design) was used. Results indicated the following. (1) Social distance was longer with an image of mental illness was presented than when there was no such image. (2) Low attributional complexity predicted the degree of social distance in both conditions. (3) Intolerance of ambiguity predicted the degree of social distance for people with mental illnesses. The implications of these results are discussed.

key words: social distance, attributional complexity, tolerance of ambiguity, people with mental illnesses

問 題

日本の医療社会福祉領域では、精神障害者地域移行・地域定着支援事業といった、地域での福祉的・医療的ケアに重点を置いた支援が、今後益々活発化すると考えられる（内閣府，2011）。だが、こうした方向に行政が舵を切っても、実際は精神障害者に対する地域住民の心のバリアフリー化（心理的排除の低減）が追いついておらず、理解不足から住居の提供や雇用を断るなど、受け入れ体制が不十分である（e.g., Tanaka, Inadomi, Kikuchi, & Ohta, 2005）。

本研究では、集団成員への排除²⁾の一つの指標

と考えられる社会的距離（social distance）の延伸（e.g., Gaebel, Baumann, Witte, & Zaeske, 2002; 山崎, 2012）に着目し、先行研究では未検討であった、精神障害者に対する社会的距離を増大ないし短縮する要因と予測される「帰属複雑性」と「曖昧さ耐性」の効果を検討する。なお、本研究では精神障害者として、主に統合失調症の方を想定している。これは、地域での受け入れ先が見つからず、社会的入院を余儀なくされている統合失調症の方が非常に多く、地域移行支援事業の主な対象者であることが理由である。

帰属の失敗と否定的認知の生起

社会生活を送るなかで、私たちは多くの他者に出

¹⁾ 本論文を執筆するにあたり、神戸山手大学の村上幸史先生には、数多くの貴重なご意見を頂きました。心より感謝申し上げます。

本研究は、平成 25 年度大阪大学・卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」による若手研究者養成費を得て実施された。

本研究の一部は、日本社会心理学会第 54 回大会で発表された。

* 大阪大学大学院人間科学研究科

Graduate School of Human Sciences, Osaka University, 1-2 Yamadaoka, Suita, Osaka, 565-0871, Japan

e-mail: muto@hus.osaka-u.ac.jp

会い相互作用を行うが、相手の考えや行動を理解できないという場面に遭遇することがある。そのとき、理解できない相手との社会的距離を遠ざけることで、安定感を取り戻そうとすることもあろう（e.g., 武藤・釘原, 2013）。

社会的距離とは、自己と対象との遠近を親近感の度合いに応じて表現するもの（e.g., 山崎, 2012）であり、自他間の理解の程度にも関連する（Bogardus, 1925）。社会的距離が近いと親密度（closeness）が増す（Liviatan, Trope, & Liberman, 2008）。また、社会的距離の近い相手は、類似性も高く認知され、好意度も高く評価される（Liviatan et al., 2008）。社会的距離を遠ざけることで、相手との関係関与度を弱め、ストレスを低減することも可能となるだろう。つまり、相手の言動が理解できない場合、不快な状態を低減する防衛戦略の一つとして、相手に対する社会的距離を遠ざけることで、相手を自分とは異なるカテゴリーの人物とみなし、連帯感を断つことで認知的統制感を得、安心感を取り戻すと考えられる。

先行研究では社会的距離を問う項目として、相手と友人関係を持つことの困難さや、一緒に働くことへの不安や当惑、近隣に居住することへの反対、自分や親族が相手と結婚することへの反対、などが主に用いられている（e.g., Gaebel et al., 2002）。社会的距離の遠近は、しばしば差別的評価の指標とされる（山崎, 2012）。例えば、精神障害者の退院後のケアについて地域住民に調査を行ったところ、在宅ケアを受けることや、精神障害者の福祉施設ができることに反対する声も多い（e.g., Tanaka et al., 2005）。こうした回答をする人々は、精神障害者と職場の同僚になったり、隣組のような地域住民との近接関係ができることに否定的な意見も多いことが報告されている。

社会的距離の延伸に影響を及ぼす内的要因

ところで、医療社会福祉領域における先行研究では（e.g., Gaebel et al., 2002; 山崎, 2012）、精神障害者に対する否定的認知に影響する要因として、基本的属性（外的要因）（e.g., 年齢や接触経験、学歴や収入）を測定することが多く、内的要因に関する研究は乏しい。

そのようななかで、山崎（2012）の研究は、精神障害者の病因について、若年（18歳から29歳）の方が中高年（50歳から64歳）よりも、内的帰属（例えば性格の問題として帰属）を行いやすいことを示した。さらに、精神障害者の他害の可能性については、若年に比べ中高年の方が低く見積もっていた。これらのことより、若年と中高年では、中高年の方がより寛容であるというように、精神障害者に対する認知に差があることが考えられ、年齢による帰属の様態の違いや、対人認知の寛容度の差異も推測される。

そして、武藤・釘原（2013）も、若年者ほどネガティブな面を重視し（積極性効果³⁾）、理解できない相手のインパクトが大きく、脅威とみなし心理的排除を行いやすいと考察している。一方、高齢世代では積極性効果に加え、相手を理解できなくとも対人認知の複雑性の高さ⁴⁾から、こういう変わった人間も世の中にはいると考えることができ、心理的排除に繋がりにくいのではないかとしている。ただし、武藤・釘原（2013）では、各世代の認知の複雑性や寛容さに関する測定項目（e.g., 帰属複雑性や曖昧さ耐性）を含めた検討を行っておらず、今後の課題としている。そして、本研究では、こうした内的要因が社会的距離に影響すると考えた。

帰属複雑性とは、人間行動の理由を理解することへの興味の度合い、モチベーションの高さをいう（Fast, Reimer, & Funder, 2008）⁵⁾。帰属複雑性が高い人は、他者の行動理解へのモチベーションが高く、多くの原因の可能性を考え（e.g., Fletcher, Danilovics, Fernandez, Peterson, & Reeder, 1986）、他者に対しオープンであることから（Townsend, Silva, Mueller, Curtin, & Tetrack, 2002）、全般的に他者を否定的に認知しに

³⁾ 人は時間が限られていると認知すると、情動的な満足を追い求めるよう動機付けられるため、高齢者はポジティブな材料を重視するようになること（Carstensen & Mikels, 2005）。

⁴⁾ Carstensen & Mikels (2005) は、年齢と認知の複雑性の関連について指摘しており、年長になるほど、一つ一つの出来事に対し多面的な認知を行うとしている。

⁵⁾ 帰属複雑性とはしばしば混同される認知的複雑性は、社会的刺激を知覚する際に用いる次元や特徴、概念の数、次元間のつながりとその構造の複雑さを示す（Fletcher et al., 1986）。他者の行動理解のみならず、すべての認知機能に広がるものといえる。

²⁾ 排除（exclusion）とは、集団からの物理的・心理的追放を意味し、集団から相手を引き離すことや距離を取るなどを意味する（Orcutt, 1973）。

くいと予測される。

Fletcher et al. (1986) は、帰属複雑性の高い人の特徴として、複雑な説明を好む、多くの原因を考慮する、メタ認知が発達している、人の行動が他者との相互作用の結果だと認識している、帰属先として、他者の内的要因や外的要因を幅広く複雑に考えられる、時間的要因 (e.g., 他者の成育歴や過去の経験) も含めて考えられることなどを挙げている。また、帰属複雑性が高い人は、非言語行動の察知能力や共感性、ソーシャルスキルも高いことが示唆されている (Fast et al., 2008)。

つまり、帰属複雑性の高い人は、人間行動の理解にあたって多くの帰属先を用い、矛盾の多い情報であってうまく情報処理を行うとされることから、精神障害の有無を問わず、どのような人物に対しても理解度が高く、受容しようという意欲も高いため、社会的距離の延伸を行いにくいと考えられる。

また、曖昧さに対し非寛容な人は、構造化やカテゴリー化ができない状況、複雑で矛盾をはらんだ、直ちには理解しがたい事態を、脅威の源泉とみなす傾向が強いとされる (e.g., Budner, 1962)。そして、抑圧や否認、回避的行動、破壊的行動や状況の再体制化といった行動を取る。曖昧さに対し非寛容な人は、曖昧な状況に際し、できるだけ速く何らかの結論に到達し、安心感を得たいという気持ちが強く働く (原田, 1989) とされる。Friedland, Keinan, & Tytiun (1999) も、曖昧さ耐性の低さと単純思考の傾向、対人認知の非柔軟さとの関連を示している。

そのため、曖昧さ耐性が低い人は、価値観に動揺をもたらしかねない集団規範の逸脱者や、理解できない人物 (e.g., 精神障害者) に対して、脅威を避けようとして、より社会的距離を遠ざけることが予測される。一方で、曖昧さ耐性が高い人は、こうした人物に対しても受容度が高く、社会的距離の延伸を行いにくいと考えられる。

ところで、先行研究では、マイノリティへの蔑視傾向と関連が強い内的要因として、例えば権威主義的パーソナリティ (e.g., Adorno, Frenkel-Brunswick, Levinson, & Sanford, 1950; Asbrock, Sibley, & Duckitt, 2010) に焦点が当てられている。ただし、権威主義的パーソナリティは、政治思想との関連が極めて強いこともあり、測定項目も人種排外主義や政治経済的保守主義の態度測定に関するものが多く、宗教や

戦争、理想の社会に関する価値観を問題としている。そのため、本研究で検討する対人行動理解のスキルや、理解できない対象の心理的受容のスキルを問題とした項目は少ない。そのため、本研究では、権威主義的パーソナリティについてはとりあげない。

そして、先述の通り、他者の行動理解度と心理的受容度に影響する要因として帰属複雑性の高さが、また精神障害者への心理的受容度に影響する要因として、曖昧さ耐性の高さが考えられるが、帰属複雑性は近年着目され研究が始まった概念であるため、精神障害者への否定的認知に与える効果に関する知見は乏しい。さらに、曖昧さ耐性と帰属複雑性の関連を見た先行研究もほとんどない。そのうえ、精神障害者への社会的距離に、曖昧さ耐性が及ぼす効果を検討したのもほとんどないため、本研究で両変数をとりあげることは、他者への否定的認知生起の仕組みをより明らかにするためにも、意義があるといえよう。

なお、本研究では、帰属複雑性と曖昧さ耐性の、社会的距離に与える各変数単独の効果も検討するが、両変数の関連の検討も行う。曖昧さ耐性とドグマティズムは強い相関を示すことが指摘されているが (Shaffer & Hendrick, 1974)、帰属複雑性とドグマティズムは無相関という報告もある (Fletcher et al., 1986)。曖昧さ耐性と帰属複雑性の関連を直接検討したものはないが、この結果から間接的にはあるが、両変数が関連しないことが予測される。そして、帰属複雑性の効果で、認知対象の障害の有無にかかわらず、対人解読度が上がり、社会的距離も近くなることが考えられるが、たとえ帰属複雑性が高くとも、曖昧さ耐性が低ければ、精神障害者に対する社会的距離が遠くなる場合があることを示す。

本研究の仮説

以上の議論より、次の仮説を導き出した。帰属複雑性低群は高群よりも、精神障害の有無にかかわらず、他者に対する社会的距離が遠くなるだろう (仮説1)。曖昧さ耐性低群は高群よりも、精神障害者に対する社会的距離が遠くなるだろう (仮説2)。そして、帰属複雑性の高低と曖昧さ耐性の高低、精神障害の有無における交互作用が予測される。精神障害者でない人物に対する社会的距離においては、帰属複雑性と曖昧さ耐性の効果の相乗作用は見られ

ない。しかし、精神障害者に対する社会的距離においては、帰属複雑性が高く、曖昧さ耐性が高い群で、最も近くなるだろう（仮説3）。

方 法

調査対象者と手続き

関西在住の、専門学校生 51 名、大学生 79 名、あるセミナーに参加していた社会人 55 名の、計 185 名（年齢： $M=26.80$, $SD=14.66$; 性別：男性 26 名、女性 159 名）を対象とした。社会人経験がある者は 55 名、全くない者は 130 名であり、社会人経験年数の平均値は 5.83 年 ($SD=11.25$) であった。なお、回答に不備のあった 5 名は、分析から除外した。

専門学校生と大学生は講義時間後に、社会人はセミナー後に、集合形式で調査を実施した。年齢や性別、社会人経験の有無、社会人年数はフェイスシートで問うた。調査では、「他者の印象に関する調査である」というカバーストーリーを伝え、言動の理解が困難な人物（精神障害者・精神障害者像提示条件）と容易な人物（精神障害でない人物・非提示条件）を描写した刺激文を提示した（参加者内要因）。提示順序はランダムとした。各刺激文には、刺激人物に対する社会的距離の測定項目を添えた。続いて、帰属複雑性と曖昧さ耐性、精神障害者と関わった体験の有無⁶⁾を測定した。最後にデブリーフィングを行い、終了とした。

質問紙

1. **刺激文と刺激人物** 本研究は精神障害者に対する人々の認知を検証するため、精神障害者像提示条件の刺激人物については、ICD-10 (WHO, 1993), DSM-IV Case Book (Spitzer, 1994) を基に、統合失調症の方の事例や症例を参考に作成した⁷⁾。

精神障害者像提示条件は、「一人暮らしをしている A から友人に、最近深夜にしきりに電話がかかってくる。だが A からの電話の内容は今一つはっきり

せず、何かに怯えている気配も感じられる。心配した友人が A のマンションを訪ねたところ、いつもは整頓好きの A の部屋は散らかっており、すべての窓がカーテンで覆われていた。A によると、最近窓の向こうからいつも誰かに見られている気がするという。また A は時々ブツブツと独り言を言って、ニヤッと笑っていることもよくある。どうしたの？と友人が聞いても、何でもないと言うだけである。さらに A は、外へ出ると人が自分を見ているといい、サングラスをかけて外出する。職場の同僚の話では、最近の A は以前と違って口数が減り、仕事への意欲も低下して、元気がないように見えるという。」という内容であった。

一方、非提示条件は、「電車の中で B の向かいに座る 2 人の若い女性が、ひそひそ話をしながらこちらを向いて笑った。B にはこれが、自分のことを悪く言って笑っているのではないかと思われた。B は学生の頃から、自分の周りで小声で話をしている人達を見ると、何か自分のことを悪く言っているように思えて気になるという。現在 B は職場で気になっていることがある。B によると、同僚が上司と一緒にになって自分の悪い評判を流そうとしているという。B 以外の人達はそのようなことは感じ取れなかったが、B にはそう思えて仕方なかった。誰かに相談しようにも B に友人はほとんどおらず、もともと人と交流するのも苦手なため、結局誰にも話せないまま一人で悩んでいる。」という内容であった。

2. **社会的距離測定項目** 精神障害者に対する社会的距離を測定している先行研究を参考に、一緒に生活したくない、一緒に働きたくない、友人になりたいくない、近くに住んでほしくない、結婚したくない、理解できない、会話したくない、このような人が家族にいると他者に知られたら恥ずかしい、など、8 項目について 9 件法で問うた (Gaebel et al., 2002; 武藤・釘原, 2013; 山崎, 2012)。平均値を社会的距離得点とした（精神障害者像提示条件： $\alpha=.90$; 非提示条件： $\alpha=.91$ ）。得点は高いほど社会的距離が遠いことを意味する。なお、「理解できない」の項目は理解困難度得点として、操作チェックでも用いた。

3. **帰属複雑性測定項目** 帰属複雑性日本語版尺度 28 項目 (佐藤・川端, 2012) を用いた (7 件法) ($\alpha=.81$)。平均値を帰属複雑性得点とした。得点が

⁶⁾ 接触経験が、対象集団の認知を複雑化させる (e.g., Linville, 1982) という報告があるため、接触経験の有無を統制変数として測定した。

⁷⁾ 各刺激文の妥当性に関して、精神科医療機関に勤務する精神科医（精神保健指定医）1 名と精神保健福祉士 2 名に、各刺激人物のような人物が実際に存在する可能性があることを確認した。臨床家達に妥当性の検証を求めたのは、これまで多様なタイプの人間を見てきており、判断も適確と考えられたからである。

高いほど、帰属複雑性が高いことを意味する。

4. **曖昧さ耐性測定項目** 曖昧さ耐性尺度 24 項目 (増田, 1994, 1998) を用いた (5 件法)。平均値を曖昧さ耐性得点とした。得点が高いほど、曖昧さ耐性が高いことを意味する ($\alpha=.78$)。

5. **精神障害者との接触経験の測定項目** 精神障害者との接触経験が、印象を好転させるという報告もあるため (e.g., Gaebel et al., 2002), 精神障害者と身近に関わったことがあるか否か, 2 択で回答させた。本項目は統制変数とした。

結 果

刺激文提示順序の効果に関するチェック

刺激文の提示順序の効果の有無を確認するため、精神障害者像提示条件の刺激文先行条件 (以下, 提示条件先行) と, 非提示条件の刺激文先行条件 (以下, 非提示条件先行) を独立変数に, 精神障害者像提示条件と非提示条件の社会的距離得点, 帰属複雑性得点, 曖昧さ耐性得点を従属変数とした t 検定を実施した。

その結果, 精神障害者像提示条件の社会的距離得点 (提示条件先行: $M=5.88, SD=1.51$; 非提示条件先行: $M=6.05, SD=1.58$; $t(178)=-.75, n.s.$), 非提示条件の社会的距離得点 (提示条件先行: $M=4.16, SD=1.75$; 非提示条件先行: $M=4.55, SD=1.46$; $t(178)=1.65, n.s.$), 帰属複雑性得点 (提示条件先行: $M=4.46, SD=.63$; 非提示条件先行: $M=4.37, SD=.63$; $t(178)=.95, n.s.$) のいずれにおいても有意差は見られなかった。曖昧さ耐性得点 (提示条件先行: $M=2.78, SD=.45$; 非提示条件先行: $M=2.92, SD=.47$; $t(178)=2.01, p<.05$) では若干の有意差が見られたが, 主な従属変数である社会的距離得点で有意差が見られなかったため, この 180 名を対象に, 以降の分析を進めた。

刺激人物に関する操作チェック

精神障害者像提示条件と非提示条件で理解困難度得点に違いがあるか検討するため, t 検定を実施した。その結果, 精神障害者像提示条件は ($M=5.21, SD=2.19$), 非提示条件 ($M=3.27, SD=1.87$) よりも有意に理解困難度が高かった ($t(177)=10.78, p<.01$)⁸⁾。

⁸⁾ t 検定の自由度が 177 となっていたのは, 非提示条件の理解困難度得点に, 2 名分の欠損値があったためである。

精神障害者像提示条件の刺激人物は, 非提示条件の刺激人物よりも, 理解困難と認知されていた。以上の結果より, 操作はうまくいったとみなし, 以降の分析を進めた。

仮説検証

精神障害者像提示条件と非提示条件で社会的距離得点に違いがあるか, また帰属複雑性の高低と, 曖昧さ耐性の高低によって, 社会的距離得点に差があるか (仮説 1・2・3) を検討するため, 帰属複雑性 (高群・低群) と曖昧さ耐性 (高群・低群)⁹⁾ を参加者間要因, 刺激人物 (精神障害者像提示条件・非提示条件) を参加者内要因とし, 社会的距離得点を従属変数とする 3 要因分散分析を実施した (Table 1)^{10), 11)}。

その結果, 刺激人物の主効果 ($F(1, 352)=83.24, p<.01$), 帰属複雑性の主効果 ($F(1, 352)=5.32, p<.05$) が有意であり, 曖昧さ耐性の主効果が有意傾向であった ($F(1, 352)=3.32, p<.1$)。Table 1 が示す通り, 精神障害者像提示条件は, 非提示条件よりも社会的距離が遠かった。また, 帰属複雑性低群は, 帰属複雑性高群よりも社会的距離が遠かった。そして, 曖昧さ耐性低群は, 曖昧さ耐性高群よりも社会的距離が遠かった。

また, 刺激人物と曖昧さ耐性の交互作用が有意であった ($F(1, 352)=4.11, p<.05$)。しかし, 刺激人物と帰属複雑性の交互作用 ($F(1, 352)=.40, n.s.$), 曖昧さ耐性と帰属複雑性の交互作用 ($F(1, 352)=.19, n.s.$), 刺激人物と帰属複雑性と曖昧さ耐性の交互作用 ($F(1, 352)=1.16, n.s.$) は有意でなかった。

⁹⁾ 分析にあたっては, 帰属複雑性得点, 曖昧さ耐性得点の各々中央値以上を高群, 以下を低群とした。

¹⁰⁾ 男性と女性の参加者数にひらきがあるため, 性差の影響を確認する目的で t 検定を実施したところ, 社会的距離得点 (女性: $M=5.10, SD=1.29$; 男性: $M=5.53, SD=1.43$; $t(178)=1.51, n.s.$), 帰属複雑性得点 (女性: $M=4.42, SD=.72$; 男性: $M=4.42, SD=.62$; $t(178)=.01, n.s.$), 曖昧さ耐性得点 (女性: $M=2.92, SD=.47$; 男性: $M=2.84, SD=.46$; $t(178)=.86, n.s.$) のいずれにおいても有意差は見られなかった。そのため, 男女のデータを統合し, 分析を実施した。

¹¹⁾ 帰属複雑性と曖昧さ耐性の関連を見るため, 両得点の相関分析を実施したところ, 有意な相関は見られなかった ($r=-.04, n.s.$)。両者の関連は確認されなかった。

Table 1 曖昧さ耐性高・低と帰属複雑性高・低および精神障害者像提示・非提示の各条件における社会的距離得点の平均値 (SD)

		精神障害者像提示条件	非提示条件
曖昧さ耐性低群	帰属複雑性低群	6.25 (1.46)	4.63 (1.77)
	帰属複雑性高群	6.22 (1.50)	4.02 (1.52)
曖昧さ耐性高群	帰属複雑性低群	5.85 (1.40)	4.56 (1.58)
	帰属複雑性高群	5.30 (1.83)	4.16 (1.62)

刺激人物と曖昧さ耐性の交互作用が有意であったため、単純主効果検定を行ったところ、曖昧さ耐性の有意な単純主効果が、精神障害者像提示条件で見られたが ($F(1, 356)=5.88, p<.05$)、非提示条件では見られなかった ($F(1, 356)=.35, n.s.$)。また、刺激人物の有意な単純主効果が、曖昧さ耐性高群 ($F(1, 356)=26.29, p<.01$)、曖昧さ耐性低群で見られた ($F(1, 356)=72.65, p<.05$)。精神障害者像提示条件では、曖昧さ耐性低群が、曖昧さ耐性高群よりも社会的距離が遠かった。そして、曖昧さ耐性高群、曖昧さ耐性低群共に、精神障害者像提示条件の方が、非提示条件よりも社会的距離が遠かった。

精神障害者像提示条件は非提示条件よりも、社会的距離が遠く認知されていた。また、曖昧さ耐性が低いと、精神障害者像提示条件で社会的距離をより遠く認知していたことから、仮説2は支持された。そして、帰属複雑性が低いと、刺激人物の内容に関わらず社会的距離が遠かったことから、仮説1も支持された。だが、刺激人物と帰属複雑性、曖昧さ耐性の交互作用は有意でなく、仮説3は不支持だった¹²⁾。

さらに、帰属複雑性が対人理解度に影響するか確認するため、両条件において、帰属複雑性得点と理解困難度との相関分析を実施した。その結果、有意な負の相関が見られた (精神障害者像提示条件: $r=-.27, p<.01$; 非提示条件: $r=-.19, p<.01$)。帰属複雑性が高いと理解困難度が低くなる (理解度が上がる) ことが示された。

考 察

本研究は、帰属複雑性や曖昧さ耐性などの内的要因が、精神障害者や、その他の人物に対する社会的距離に及ぼす影響を検討した。その結果、帰属複雑性が低いほど、精神障害の有無にかかわらず、他者への社会的距離が遠くなることが示された。また、曖昧さ耐性が低いほど、精神障害者に対する社会的距離が遠くなることも示された。しかし、帰属複雑性と曖昧さ耐性の交互作用は認められなかった。

仮説検証の結果を考察する前に、まず、精神障害の有無によって、人々の心理的反応に違いがあったことについて述べる。精神障害者像提示条件は非提示条件よりも、社会的距離が遠く認知されていたことは、精神障害者に対する否定的認知が見られたといえる。これについて、理解困難な対象を前にすると、人は心理的な防衛戦略を働かせ、社会的距離を遠ざける機会があれば、これを用いることが示唆されたといえる。

次に、仮説検証の結果について考察する。帰属複雑性が低いと、両条件で社会的距離が遠かったこと、帰属複雑性の高さや理解困難度の低さとの関連が見られたことから、帰属複雑性の高さが、行動の原因推測のスキルと、他者理解への意欲や、相手を受容しようという意欲に影響する可能性が示されたといえる。従来の知見のように (e.g., Fletcher et al., 1986; Townsend et al., 2002)、帰属複雑性は他者の行動理解へのモチベーションや、行動の原因の解釈、他者への心理的なオープンさを予測することが確認された。帰属複雑性が高い人は、どのような人物に対しても理解度が高く、全般的に他者を否定的に認知しにくいことが示唆された。

また、曖昧さ耐性が低いほど、精神障害者に対する社会的距離が遠くなっていたことから、曖昧さ耐性の高低によって、行動の原因推測が困難な対象

¹²⁾ 統制変数として測定した、年齢・性別・社会人年数・接触経験などのデモグラフィックな変数の効果については、社会的距離得点を従属変数とした重回帰分析を実施し確認した (ステップワイズ法)。その結果、非提示条件で、年齢のみが有意な正の影響を及ぼしていたが (年齢: $\beta=.16, p<.05$) ($F(1, 164)=4.17, p<.05$)、他の変数では有意な結果は見られなかった。

を、受容しようという意欲が影響される可能性が示されたといえる。曖昧さ耐性が低いと、理解しがたい事態を脅威の源泉とみなす傾向が強く（原田, 1989）、種々の心理的な防衛反応を行う。曖昧さ耐性が低い人たちにとって、本研究で理解困難人物（精神障害者像提示条件）とした刺激文は、よく分からない、理解し難い脅威状況となったのかもしれない。そして、不快な脅威状況から脱するため、心理的な防衛反応を働かせ、つまり本研究では社会的距離を遠ざけることで、安定感を取り戻そうと試みたのかもしれない。

このように、本研究では帰属複雑性と曖昧さ耐性おのおの、社会的距離に対する効果を検討した。併せて、両変数の関連の検討も実施した。その結果、両変数の相関は有意でなく、関連は確認されなかった。本研究では、ドグマティズムと各変数の関連を検討した先行研究を基に（Fletcher et al., 1986; Shaffer & Hendrick, 1974）、両変数が関連しないとの予測を立てていたが、結果としてこの予測が妥当であったと示唆されたといえる。これはおそらく、両変数が独立した、異なる影響力を持つ要因であるからだろう。帰属複雑性は、曖昧な状況でも熟考し、曖昧なものを曖昧でないようにするスキル、いわば、主に曖昧な状況をうまく読み解くスキルであり、一方の曖昧さ耐性は、曖昧なものを受け容れるスキル、曖昧な状況を曖昧でないようにするのではなく、曖昧さが解消できない状況であっても、それに耐えることができるスキルを指し示していると考えられる。

そして、帰属複雑性と曖昧さ耐性の交互作用は確認されなかった。これは、両変数間の相互作用がないことを表していると考えられる。上述のように、両変数は互いに絡み合うことなく、別々に社会的距離に影響を及ぼすことが、本研究の結果より推察される。

さらに、デモグラフィックな要因の、社会的距離に及ぼす効果については、精神障害者像提示条件ではいずれも影響は見られず、非提示条件で、年齢のみ効果が確認された。年齢の高さが、社会的距離の延伸を予測していた。つまり、年長になるほど、精神障害でない人物に対して、厳しい評価を下していたのである。これは、社会経験を経る中で、人間関係や社会の厳しさを知った年長者ほど、本研究で

扱ったようなターゲット（精神障害者ではないが、対人関係に敏感な人物）に対して、厳格な判断を下すことを示唆している。「社会人として、こうあるべき」というステレオタイプを、年長者ほどより堅固に保持している可能性が推察される。本研究で扱ったターゲットを軟弱な人物と見なし、厳しい評価を下したのかもしれない。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、統制要因の一つとして社会経験を含めたが、社会人年数しか測定していない。しかし、他にも、例えば職種や学歴、年取などの影響も示唆されている（山崎, 2012）。そのため、具体的にどういった職種に就く人が、精神障害者に対する寛容度が高いかなど、今後検討していく必要がある。

また、本研究では、顕在指標による測定項目を用いた。しかし、他者に対する否定的態度は、表面上に現れにくい可能性もある。他者への否定的態度の測定方法は、実験者が定めた指標ではなく、認知者にとって自発的な指標を用いることも必要である。研究の信頼性を高めるためにも、今後、潜在指標や行動指標なども併せて検討していく。

さらに、自他の関係性によっても、社会的距離の遠近に違いが見られると考えられるため、今後、刺激人物の条件を増やして検討していくことも課題である。本研究では、未知の他者を認知対象としたが、既知の相手を認知対象とし、社会的距離の遠近の差と、その差を生み出す要因を今後検討する。

引用文献

- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. 1950 *The Authoritarian Personality*. New York: Harper.
- Asbrock, F., Sibley, C. G., & Duckitt, J. 2010 Right-wing authoritarianism and social dominance orientation and the dimensions of generalized prejudice: A longitudinal test. *European Journal of Personality*, **24**, 324–340.
- Bogardus, E. S. 1925 Measuring social distances. *Journal of Applied Sociology*, **9**, 299–308.
- Budner, S. 1962 Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, **30**, 29–50.
- Carstensen, L. L., & Mikels, J. A. 2005 At the intersection of emotion and cognition: Aging and the positivity effect. *Current Directions in Psychological Science*, **14**, 117–121.
- Fast, L., Reimer, H., & Funder, D. 2008 The social behavior and reputation of the attributionally complex. *Journal of*

- Research in Personality*, **42**, 208–222.
- Fletcher, G. J. O., Danilovics, P., Fernandez, G., Peterson, D., & Reeder, G. D. 1986 Attributional complexity: An individual differences measure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 875–884.
- Friedland, N., Keinan, G., & Tytiun, T. 1999 The effect of psychological stress and tolerance of ambiguity on stereotypic attributions. *Anxiety, Stress, and Coping*, **12**, 397–410.
- Gaebel, W., Baumann, A., Witte, A. M., & Zaeske, H. 2002 Public attitudes towards people with mental illness in six German cities. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, **252**, 278–287.
- 原田唯司 1989 あいまいさに対する不寛容, 政治的関心, および政治的態度の三者関係について 心理学研究, **60**, 133–140.
- Linville, P. W. 1982 The complexity-extremity effect and age-based stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 193–211.
- Liviatan, I., Trope, Y., & Liberman, N. 2008 Interpersonal similarity as a social distance dimension: Implications for perception of others' actions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 1256–1269.
- 増田真也 1994 曖昧さに対する耐性と心理的ストレスに関する研究 日本心理学会第58回大会発表論文集, 91.
- 増田真也 1998 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術), **47**, 151–163.
- 武藤麻美・釘原直樹 2013 不安がサブタイプ化に及ぼす影響 日本心理学会第77回大会発表論文集, 135.
- 内閣府 2011 障害者白書(平成23年度版).
- Orcutt, J. D. 1973 Societal reaction and the response to deviation in small groups. *Social Forces*, **52**, 259–267.
- 佐藤陽子・川端美樹 2012 帰属複雑性尺度の日本語版試作および関連する諸要因の検討 対人社会心理学研究, **12**, 111–120.
- Shaffer, D. R., & Hendrick, C. 1974 Dogmatism and tolerance for ambiguity as determinants of differential reactions to cognitive inconsistency. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 601–608.
- スピッツァー, R. L., 高橋三郎・染矢俊幸(訳) 1996 DSM-IV ケースブック 創造出版. (Spitzer, R. L. (Ed.) 1994 *DSM-IV Case Book*. Arlington: American Psychiatric Pub Inc.)
- Tanaka, G., Inadomi, H., Kikuchi, Y., & Ohta, Y. 2005 Evaluating community attitudes to people with schizophrenia and mental disorders using a case vignette method. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, **59**, 96–101.
- Townsend, J. C., Silva, N. D., Mueller, L., Curtin, P., & Tetrick, L. E. 2002 Attributional complexity: A link between training, job complexity, decision latitude, leader-member exchange, and performance. *Journal of Applied Social Psychology*, **32**, 207–221.
- WHO, 融 道男・中根允文・小見山 実(監訳) 1993 ICD-10 精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン— 医学書院. (World Health Organization. 1992 *The ICD-10 Classification of Mental and Behavioural Disorders: Clinical Descriptions and Diagnostic guidelines*. Switzerland: World Health Organization.)
- 山崎喜比古(監修) 2012 心の病へのまなざしとステイグマ—全国意識調査— 明石書店.

(受稿：2014.8.21; 受理：2014.11.14)